

誰もが挑戦できる社会を目指して

都城さくら聴覚支援学校高等部 3年 いし べ ゆ ら
石 部 夢 蕾

皆さんは、「聾者」という言葉を知っていますか？私たちの中には、自分たちのことを「聴覚障害者」ではなく、「聾者」という人もいます。「聾」は、龍の耳、龍は、音を聞くことはできないが角で感知するのだそうです。私も、耳だけで情報を得ることはできないので、口の形、表情、手や指の動き、体の動き、触感、臭いで、情報を捉えます。だから、「龍の耳を持つ者」という「聾」の漢字は、とてもかっこよく、私たちは「音の聞こえない者」＝「聾者」という言葉に誇りをもち、聞こえないことを、とてもポジティブに捉え、前向きになれます。

私は将来、人の暮らしを支える自動車製造の仕事に就きたいと思っています。多くの聾者がこの分野で活躍し、私たち後進に道を開いてくれました。この夢に向かって、今一步一步進んでいます。しかし、私たち聾者は、夢を制限されていた時代がありました。例えば、運転免許取得が認められたのは1973年、全く音が聞こえない聾者が免許をとれるようになったのは、2008年です。他にも、医師などの医療関係、トラック運転手などの職業にも就けない時代がありました。現在も筆談をしている時間がない、聞こえないと危険だからという職場もあります。聾者は、まだ挑戦することさえ許されないのかと落胆します。

障害者権利条約により、障害は、個人にあるのではなく、社会の側にある壁が障害の原因だとされる「社会モデル」が基本となっています。聞こえないという私たち個人の障害ではなく、聞こえないから何かができなくなるということが障害なのです。少しずつ、社会は変わってきていますが、まだまだ多くの壁があると感じます。実際、私にも社会の壁を感じた経験があります。高1の時、聴覚障害があることを伝えて飲食店にアルバイトの応募をしましたが、不採用でした。音が聞こえないと、接客ができない、危険だという理由でした。次のアルバイトは障害があることを了解した上で採用となり、諦めなくてよかった、全力で頑張ろうと思いました。実際に働いてみて、コミュニケーションや社会常識、楽しさや大変さなどを知ることができ、よかったこともありました。残念だったのは、注文の変更を口で伝えられ、私では対応できず、仕方なく別な人がするという流れになってしまったことです。もし、変更などが見えるモニターやタブレットなど別な方法、工夫があれば、私でもできるのに、戦力となって働けるのにと悔しくなりました。この経験から、障がいの有無、国籍、性別、多様な個性に関わらず挑戦できる社会になるために私たちができることはないかと考えるようになりました。「私たちぬきに私たちのことを決めないで！」という全盲の方の言葉があります。当事者である私たちだからこそ、何が社会の障壁なのか、どうすれば誰もが自分の夢に挑戦できる社会になるかに気づき、発信することができると思います。

私は、まず、なにより私たちの言語、手話の魅力を広め、聞こえ方には色々あり、それぞれに合った情報の獲得手段、サポートの方法があることを伝えていきたいと考えています。手話は1つの動きで瞬時に伝わるので、介護や福祉の現場でのトイレなどの意思確認に使われているそうです。私たちが積極的に社会に関わり、気づきを発信することで、多様性を受け入れる社会、様々な人が挑戦できる社会に一步一步近づけると信じています。誰もが挑戦できる社会に変えていくこと、それが聾者として、私のこれからの挑戦です。